
屁理屈

さと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屁理屈

【コード】

N6702D

【作者名】

やと

【あらすじ】

流山で近藤を捕らえられた土方は、助命嘆願の為に勝海舟と面会をするが……。

眼前に座って自分を睨めつける男を、土方歳三は焦燥と共に見遣った。

公式な接見ではないので、その男は袴も付けていない。渋茶の木綿の着流し姿で胡坐をかき、膝をボリボリと掻いている。

対する土方は紋付袴で完全な正装だ。短く切られた髪が少しだけその衣装から浮いている。しかし洒落者のこの男も、さすがに髪型を気にしたり相手の態度に苦言を呈したりする余裕はない。

事は一刻を争うのだ。

「勝殿」

低く、相手の名を呼びにじり寄る。

勝は土方を睨みつけたまま、重い吐息と一緒に「嘆願書ねえ……」と言葉を吐き出した。

自分の立場を考えるならば、勝にとっては一言も耳を傾けることなく唾棄したい申し出だろう。

今更、新撰組局長近藤勇の助命嘆願をするなど。

江戸城を無血で開城に漕ぎ着けたこの時期に誰が得をするというのだ。まるで、正気の沙汰ではない。

「今更どの面ア下げてこの俺にそんなことを言うんだい。勝手に戦準備を始めてあすこに移ったのはおめえさん方じゃあないか」

反論の余地などない勝の言葉に土方は目を細める。だが、ここで退くわけにはいかなかった。

「お言葉ですが、勝殿。私は幕臣大久保大和の命を救っていただけますようお願いに参ったのであって新撰組局長の助命に来たわけではござらん」

「そりゃあ……」

勝が嗤った。

「屁理屈つてもんだぜ土方。おい、屁理屈つて分かるか。屁みてえ

な理屈のことよ。誰がそんな臭い理屈に納得するってんだ」

「屁理屈などでは……」

「じゃあおまいさんは、西郷や桂みてえな奴らが今更名を変えたとして、それで全てを許せるってのかい」

「それは……」

二の句が継げなかった。

完全に黙り込んでしまった土方に、勝は厳しい視線で追い討ちをかける。

「なあ、土方。名前一つ捨てたからといって全くの別人になれるわけじゃあないんだぜ。近藤はまだてめえの持ちモンを全部は捨てていねえ。大事な一つを持ったきりだ。それじゃあ、あいつはどこまで行っても近藤勇だよ」

「大事な一つ、とは」

「志だよ」

事も無げに告げられた勝の言葉に土方は打たれた。

全身に雷が駆け抜けたかのような衝撃に、近藤が捕らわれて以来焦燥で霞んでいた思考が、一気に晴れたような気がした。

「まあ、いいさ。理詰めのおまえさんの屁理屈捏ねる様が見れたんだ。嘆願書、書くだけは書いてやろうじゃないか。だが、その後の事は知らねえよ」

会見の目的は果たした。土方に、それ以上の言葉は必要なかった。膝の上で両の拳を握り締め、頭を下げる。その上から声が降った。

「土方」

立ち上がった勝が土方を見下ろしていた。その瞳に、初めのような嫌悪感が含まれていない。

「どうせ死ぬつもりならつまらぬ所で死ぬもんじゃあないぜ。人には死に時死に場所てえのがちゃあんと用意されてるんだからよ」

慰撫するような声だった。

土方はすぐに顔を上げることが出来ず、勝が部屋を辞した後も首を垂れたまま、暫し静かに流れる時の音を聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702d/>

屁理屈

2010年10月9日01時26分発行